がん治療には、自己選択、自己決定の側面が多いよう

緩和ケアの NPO 活動に若干係わっていることもあり、新聞誌上で時に目にしていたが、その連載が書籍として出版されたことを知り、「がん患者を生きる」を購読した。

がんの各症例ルポとその症例内容に関係する情報紹介と記者のコメントで構成された１４事例が紹介されていた。

がんは、病院や Dr により治療法が異なることもあり、手の施しようがないがんが治癒することもあり得るということは、選択し受ける治療法によっては自らの人生も異なることになり得るということになる。

つまり、自分で情報をあさって、セカンドオピニオンも自ら求めて動く勇気も必要となる。

また、公的医療保険の効かない治療法もあり得るのだから、経済的なことからも治療法の自己選択を迫られることもあり得る。

まして、医学は日進月歩だけに、明日は治療可能となることだってあり得る。

Dr と相談するためにも外国の最新治療情報も手に入れるために翻訳ソフトさえ活用しなくてはならない時代とか。

正に、がん治療には、自己選択、自己決定しなくてはならない側面が多いということのよう。

では、患者として、また、家族として、どの治療法を選択すればいいのか。

病院や Dr 巡りをする「がん難民」にならないように、「がん患者を生きる」ために、情報をどう収集し、どう活用するか等にも本書は触れている。

がんに関する情報はインターネットや書籍上でも氾濫している。

その多種・多様な情報から、納得いく治療を選ぶには、患者側の努力や工夫、勇気も大切ということのよう。

結局、自分の治療を後悔しないように選択するためには、選択する基準となるもの（人生観等）を日頃からの自らの中でどう育んでおくかが問われるということかも……。

日本人の死因の３割が「がん」による時代だけに、自分ががんを患った折に、また、家族、友人、知人のがん治療に関する情報等の有効活用の仕方を知っておくと、戸惑いも少ないかなと思うので、参考までに本書をご一読されてはいかがでしょうか。

阿部幸泰　　（2007 年 3 月 16 日　記）